

# カウンセラーが如何に生きるか

## —卓越した心理臨床家・霜山徳爾の生き方を手がかりにして—

鶴田 一郎

(広島国際大学心理科学部臨床心理学科)

【要旨】 カウンセラーが如何に生きるか。カウンセラーになって以来、この問題が頭から離れたことはない。自明の事ながら「カウンセラーが如何に生きるか」という問いは「私が如何に生きるか」という自分自身への問いである。一般的抽象的な意味での「カウンセラー」ではない。そのような問題を考えていく内に、その著書を通じてたいへん影響を受けた人物がいる。戦後のわが国の臨床心理学を根底で支え続けていた霜山徳爾先生である。霜山の生き方を通じた心理臨床観をまとめると、次のようになるだろう。それはまず相手に「畏敬の念」を抱きつつ、「思いやり」をもって相手とかかわることから始まる。この場合の「思いやり」には霜山の共生共苦の生き方から言えば compassion という英語が当てられるだろう。そして、このようなカウンセラーの生き方そのものには「同行」という概念がよく当て嵌まる。以上の視点から、本稿では、まず霜山徳爾の経歴や生きてきた道を素描した上で、次に「カウンセラーが如何に生きるか」という問いに対してキーワードとなると考えられる「コンパッション」「畏敬の念」そして「同行」という概念について、霜山徳爾の生き方を基礎において、考察・論考を試みた。

### I. はじめに—問題の所在—

カウンセラーが如何に生きるか。カウンセラーになって以来、この問題が頭から離れたことはない。自明の事ながら「カウンセラーが如何に生きるか」という問いは「私が如何に生きるか」という自分自身への問いである。一般的抽象的な意味での「カウンセラー」ではない。

そのような問題を考えていく内に、その著書を通じてたいへん影響を受けた人物がいる。戦後のわが国の臨床心理学を根底で支え続けていた霜山徳爾先生(以下、敬称略)である。霜山の生き方を通じた心理臨床観をまとめると、次のようになるだろう。それはまず相手に「畏敬の念」を抱きつつ、「思いやり」をもって相手とかかわることから始まる。この場合の「思いやり」には後述する霜山の共生共苦の生き方から言えば compassion という英語が当てられるだろう。そして、このようなカウンセラーの生き方そのものには「同行」という概念がよく当て嵌まる。

以下、まず霜山徳爾の経歴や生きてきた道を素描した上で、次に「カウンセラーが如何に生きるか」という問いに対してキーワードとなると考えられる「コンパッション」「畏敬の念」そして「同行」という概念について、霜山徳爾の生き方を基礎において、考察を試みる。

## II. 霜山徳爾の生き方—共生と共苦—

ここでは『霜山徳爾著作集・全7巻』(1999-2001)をはじめ、霜山(1987・1995・2005)、霜山・片岡・梶田・倉戸(2001)、畑島(2006)などを参照して、特に「共生と共苦」という点に焦点をあてて、霜山徳爾の生きてきた道の素描を試みる。

### (1) 霜山徳爾略歴

和暦	西暦	年齢	事 項
学歴・職歴など			
大正8年	1919年	0歳	東京に生まれる(7月5日)
昭和17年	1942年	23歳	東京大学文学部心理学科卒業、宗教哲学・心理学専攻(9月20日)
昭和20年	1945年	25歳	石坂操子と結婚(3月)
昭和21年	1946年	26歳	旧制 成蹊高等学校教授(2月1日)
昭和21年	1946年	26歳	上智大学講師(4月1日)
昭和23年	1948年	28歳	東京保育専門学校講師(非常勤)理事(4月1日)
昭和24年	1949年	29歳	成蹊大学教授(4月1日)
昭和25年	1950年	30歳	上智大学文学部助教授(4月) 成蹊大学講師兼任(4月、昭和49年3月まで)
昭和26年	1951年	31歳	聖心女子大学講師兼任(4月)
昭和28年 から	1953年 から	33歳 から	研究休暇(サバティカル・イヤー)；ボン大学に留学。 Ph.D取得(昭和31年9月30日) [Ph.D=学術博士]
昭和30年	1955年	35歳	帰国・復職
昭和32年	1957年	37歳	上智大学文学部教授(4月)
昭和40年	1965年	45歳	上智大学文学部教育学科長(4月、昭和50年3月まで)
昭和44年	1969年	49歳	東京藝術大学音楽学部大学院講師兼任(4月、昭和58年3月まで)
昭和50年	1975年	55歳	上智大学文学部長(4月、昭和54年3月まで)
昭和54年	1979年	59歳	上智大学理事就任(人事・労務担当)(4月、昭和60年3月まで)
昭和55年	1980年	60歳	日本女子大学文学部教育学科講師兼任(4月、昭和61年9月まで) 東京医科歯科大学医学部非常勤講師(4月、昭和60年3月まで)
昭和56年	1981年	61歳	上智大学大学院文学研究科教育学専攻主任(4月、昭和60年3月まで)
昭和58年	1983年	63歳	東京藝術大学音楽学部大学院客員教授(4月、昭和62年3月まで)
昭和60年	1985年	65歳	上智大学特別待遇教授(4月)
昭和60年	1985年	65歳	上智大学カウンセリング研究所長およびカウンセリング・センター長 (4月、昭和61年3月まで)
平成元年	1989年	69歳	東洋英和女学院大学大学院教授兼任(4月)

平成2年	1990年	70歳	上智大学退職(3月) 上智大学名誉教授(4月)
平成21年	2009年	90歳	他界される(10月6日)
主な著書・翻訳書			
昭和24年	1949年	30歳	カール・アダム『カトリシズムの本質』吾妻書房(翻訳書)
昭和26年	1951年	32歳	ベルンハルト・シュルツェ『ベルジャエフの哲学』理想社(翻訳書)
昭和31年	1956年	37歳	ヴィクトール・フランクル『夜と霧』みすず書房(翻訳書) (後に『フランクル著作集1』に収録)
昭和32年	1957年	38歳	ヴィクトール・フランクル『死と愛』みすず書房(翻訳書) (後に『フランクル著作集2』に収録)
昭和33年	1958年	39歳	『明日が信じられない』(カッパブックス)光文社
昭和36年	1961年	41歳	ヴィクトール・フランクル『神経症——その理論と治療II』(フランクル著作集5)みすず書房(翻訳書)
昭和46年	1971年	52歳	『人間とその陰』中央出版社(現・サンパウロ社)
昭和50年	1975年	56歳	『人間の限界』(岩波新書)岩波書店
昭和50年	1975年	56歳	『仮象の世界』思索社
昭和52年	1977年	58歳	『人間へのまなざし』(中公叢書)中央公論社
昭和53年	1978年	59歳	『人間性の心理学』日本放送協会(NHK テレビ大学講座テキスト)
昭和53年	1978年	59歳	『人間の詩と真実』(中公新書)中央公論社(上のテキストの単行本化)
昭和60年	1985年	66歳	『黄昏の精神病理学——マレーヤの果てに』産業図書
昭和64年	1989年	70歳	『素足の心理療法』みすず書房
平成2年	1990年	76歳	『おさわがせ さいのライノー』偕成社(霜山徳爾原案、絵本)
平成11年 から	1999年 から	80歳 から	『霜山徳爾著作集』(全7巻)学樹書院
平成13年	2001年	82歳	
平成17年	2005年	86歳	『共に生き、共に苦しむ——私の「夜と霧」』河出書房新社
学会および社会における活動等			
昭和30年4月～昭和62年3月		日本心理学会会員	
昭和31年4月～平成21年10月		日本精神神経学会会員	
昭和35年4月～平成21年10月		日本教育心理学会会員	
昭和38年4月～平成21年10月		日本精神分析学会会員	
昭和40年4月～平成21年10月		日本児童精神医学会会員	
昭和43年～平成21年		日本心身医学会会員	
昭和45年～平成21年		日本犯罪心理学会会員	
昭和45年4月～平成21年10月		日本芸術療法学会会員 国際表現病理学会日本支部副会長	

昭和56年4月～平成21年10月	日本人間性心理学会会員(設立同人)
昭和57年4月～平成21年10月	日本心理臨床学会会員
昭和41年4月～昭和43年3月	文部省家庭教育専門委員会委員
昭和43年4月～昭和47年3月	文部省大学設置審議会大学設置分科会専門委員会委員(教育・保育)
昭和51年4月～昭和62年3月	法務省司法試験考査委員(心理学担当)
昭和53年4月～昭和59年3月	文部省大学設置審議会大学設置分科会委員
昭和54年4月～昭和57年3月	文部省(学術国際局)研究設備分科会委員

## (2) 霜山徳爾の生きてきた道

### 【出生から幼少年時代】

霜山徳爾は大正8年(1919年)7月5日、東京に生れた。父の家系は中国地方にあった池田藩に儒者として仕える身分であったが、明治維新を境に家は没落して、霜山の父親は丁稚奉公に出されるが、成績が優秀なため、ある人の援助を得て、一高・東大と進んで、後に裁判官となった。家族は父母、徳爾、妹の四人であった。

幼少年時代は東京郊外の家が散在する地域で育った。幼稚園にも行けず、遊び友達もおらず、一人遊びが好きな子どもであった。空気銃で撃たれるなど、ひどいいじめに遭うこともあった。また霜山が数えの五歳の時に関東大震災を東京・東中野で体験している。

### 【中学生から旧制高校時代】

中学生になり、二年生の時、小林多喜二の『蟹工船』を読む。これにより霜山は初めて社会的な矛盾や、社会的弱者に眼が開かれ、自分が育った時代に、批判と抵抗を感じた、という。その後、文学や哲学や社会科学などの本の乱読が始まったが、特に愛読したのは三笠書房版のドストエフスキー全集であった。

旧制高校(成蹊高等学校)時代は一生の友人と言えるような人々と出会ったが、病弱のため、一年間休学もした。また、この旧制高校時代には「二・二六事件」(昭和11年・1936年)にも遭遇している。

### 【東京大学時代】

旧制高校卒業後、東京帝国大学に入学するが、霜山が卒業を約一年後に控えた昭和16年(1941年)の12月8日に太平洋戦争が始まり、青年たちをめぐる情勢はにわか急に急変した。霜山をはじめ東大の学生たちは、大学図書館で朝早くから夜遅くまで、眼を<sup>鼻</sup>窪ませて、必死に知識を吸収しようとした。しかし、日本の情勢は日に日に切迫してきて、大学生の卒業は半年繰り上げられ、さらにその一年後には、学徒動員が始まった。霜山も半年繰り上げて東京帝国大学文学部心理学科を昭和17年(1942年)9月20日に卒業した。

### 【海軍時代】

大学を半年繰り上げて卒業した後、霜山は海軍兵科予備学生(後に士官)を志願し採用され、実験心理研究部に配属された。そこは、外国の文献もかなりあったが、特に心理学の応用に多忙を極めた。戦時標

準船の迷彩、夜間視力の増強訓練、暗号の解読、デマの効果等々、どれをとっても大きな研究であるが、そうこうしているうちに、みるみる米国軍に圧倒され、次第に国家の悲劇が近づいてきた。

敗戦直前、原爆が広島・長崎に落とされた。広島への原爆投下の三日後、霜山は所用で広島の惨状を見る。真黒に炭化した死体に蛆がたかり真っ白に光って見えた。それは、3月に結婚した霜山にとっては戦後の貧窮時代の始まりを予感させられるようなことだった。

### 【戦後の貧窮時代】

太平洋戦争が終結しても、それまでにも増しての食糧難が襲ってきた。霜山も食糧確保のために郊外に買出しに出かける。しかし、それでは不十分であった。また、旧制高校教授の仕事を得るが、学生自体も飢えていて空腹のために午後になると気分が悪くなる学生が急増した。そのため学校では「食料休暇」を出して、買出しに行かせたほどだった。

ところで、霜山は戦後初めて成蹊高等学校(旧制)の教壇に立って講義をする時に、作業服や航空服のまちまちの服装の学生の中に、まるで幻のごとく、青白い影が座っているのが見えるような気がした。霜山は、それが襲われた善き若人たちであることを知っていた。そして霜山が彼らの犠牲にならず、彼らが霜山の代わりになってくれたのを知らされたのであった。霜山は、すまなさに、教壇の上でほとんど慟哭しそうになった。この幻覚により、霜山は彼らのために祈り、彼らのために働こうと決心するが、自分に敵しい霜山は、その後の生活も悔恨の多いものだった、と後に述懐している。正に、その後の霜山の共生共苦の生き方の出発点は、ここにあったと思われる。

戦後、霜山は大学教授の道に進むことを志し、特に臨床心理学を生涯の専攻として選択した。新学制の下に最初は成蹊大学に、そして次に上智大学に移った。上智大学の専任助教授でありながら、心理学と精神医学、心理学と生理学、精神病理学と社会病理学の狭間の領域を研究するために、新設の東京医科歯科大学に非常勤講師として勤務することとなった。霜山は医科歯科大学の神経科で仕事をしている内に、自分にできそうな仕事を見つけて懸命に治療に励んだ。その一つは、ある労災病院で行なう災害神経症の治療であった。

労災病院であるから、当然、頭部や頸部の外傷を取り扱うのであるが、暫くすれば治療が進んで、頭部の外傷は治癒していくはずなのに、いつまでも頭痛、発熱、運動麻痺が残る患者がいた。医師はもちろん詐病を疑うわけであるが、発熱、頭痛が主観的には存在し、しかしどう見ても客観性があり得ないにもかかわらず、それは実際に発熱、頭痛を伴うのである。これは労働者にとって、症状が実際に存在すれば、一定の年金、手当などがもらえることを無意識的前提にしている。しかし、その年金たるや極めて僅かのものであり、家庭は貧窮を極めるのであった。労働者も早くよくなって、再び全力で働きたいと心から願うのであるが、年金の存在が却って妨げになっているのであった。かといつて年金の存在はありがたいという気持ちもあるのであった。ここで神経科の出番となるのであった。

また神経科の出番は頸椎損傷が少なくなかったことにもあった。当時(戦後復興期)は、このような事故が頻発した。患者は沖仲仕(港湾労働者)のような仕事の人が大部分であった。荷物の揚げ降ろしにリフトやクレーンを十分に使えない時代であり、人力による危険な重労働のため、嘔吐するものが少なくなく、患者の滑落による頸椎のさまざまな損傷も多かった。当時の医学のレベルでは、治療はほとんど

不可能なことが多く、患者は身動きもできず、次第に衰弱していった。施<sup>ほどこ</sup>す治療の方法も少なかった。彼らの余命は、食糧難の時代であったこともあり、三ヶ月から半年くらいであった。霜山は、治療の物理的方法はなくても、彼らの語ることに耳を傾け、慰<sup>なぐさ</sup>め、励ます人間は必要であると確信していた。

そうして、霜山は、神経学的には異常がないはずなのに、労災保険があるために症状の取れないノイローゼ患者の治療がすむと、午後の長い時間を頸椎損傷患者のために費やした。彼らは元は農民で、例えば東北の果てのにんにく作りだけの農村などから、川崎の工場に声をかけられて、東京に来た人たちが多かった。職種は農業と関係なく、港湾作業は初めての人たちであったが、どうやら会社はわざと重労働用のすれていない労働者を欲していたようであった。したがって邪推すれば、けが人も多く出るとは予想された。彼らは東北訛<sup>なま</sup>りの、口は重いが、しかし誠実な人間であった。それがとんだ怪我で、しかもあまりよくない予後<sup>よこう</sup>を、なんとなく察して、焦っていた。

霜山は、にこやかにまず自分の名を告げ、彼らの名を尋ね、こちらに来る日には、午後をいくらでも時間を割けることを告げると、無理にでも引きとめようとする態度がなくなり、打ち解け始め、自分の家庭や田舎のこと、このたびの災難のことなどを、思い口を開いて、心のうちを語るようになった。霜山が低いイスに腰掛け、視線を低くし、知る限りの東北の方言や、間投詞を使っているうちに、彼らの心から遠慮というもの<sup>と</sup>がなくなった。

彼らは絶望的な状況にあるということを何となく知ってしまった患者で、それだけ一層、会話というもの、心と心をつなぐもの、を求めている。夕方になって霜山が帰ろうとすると、彼らは何のかんのと嫌がり、「今度はいつ来るのか」と次の面接の約束をさせるのであった。霜山は人に待たれるということ<sup>と</sup>を、これほど重く感じたことはなかった。しかし、霜山は次々と彼らを死の世界に送るとい<sup>う</sup>悲痛な体験を重ねるしかなかったのである。

### 【留学生活】

霜山の言葉では上の患者さんたちを「裏切り」、西ドイツ、ボン大学への留学をしたことは、その行為によって霜山を長く苦しめていたという。本来留学ということは大学教員にとって職務の一部であり、何ら負い目を感じる必要もないことなのだが、共生共苦の生き方に自覚<sup>み</sup>めていた霜山にとって、苦しみのどん底にあり、やがて死んでいく患者さんを日本にのこして自分だけが晴れがましい留学生への道を選ぶことは断腸の思いだった。

一方、留学中は文字通り身を粉にして研究を続けた。ボン大学(医学部・文学部)では、ジークフリート・ベーン、ハンス・グルーレ、テオドール・リットなど、わが国でもよく知られている教授を訪ね、主に精神病理学を学んだ。なお、後に霜山が翻訳することになる自らの収容所体験を綴った壮絶な体験記録である『夜と霧』の著者・ヴィクトール・フランクルのウィーン<sup>の</sup>の自宅を訪ねたのも、この留学中である。また、その内にボン大学から二年間の留学期間を臨時的非常勤講師として働いてくれないかという申し出があり、厳しい経済状態もあり、霜山は了承する。そして博士論文の作成に夢中で取り組んでいく。後に博士号を授与される研究のテーマは「ヨーロッパの宗教芸術表現と東洋のそれとの或る心理学的比較について」であった。

## 【帰国後】

約3年間の留学生生活を終え、昭和30年(1955年)に帰国した霜山徳爾は、その後の約55年において、共生共苦の思想をきちんと懐<sup>かこ</sup>に抱<sup>いだ</sup>きながら生き、霜山独自の現象学的心理学・人間学的心理学を構築していく。そのスケールの大きさは「霜山人間学」とでも呼べるような深みと広がりがある。

しかし、そのような研究者としての学問的な業績のみならず、教育者としては誠実な心理臨床家をたくさん育て、また自身心理臨床家としてはいつも限りなく真摯に相談者と向き合い、研究者としても、教育者としても、心理臨床家としても、共生共苦の生き方を貫いている点が、「ひとりの人」として傑出している。

それを可能にしているのは、霜山の信仰(カトリックのクリスチャン)であると思われるが、最も大きな要因として、自分の代わりに死んでいったと霜山が考える無数の戦没者や、戦後霜山がかかわった明日をもしれぬ頸椎損傷の重病患者の中に、人間を超えた大いなる存在、すなわち「神」を見出したからではないだろうか。クリスチャンであることを普段あまり語らない霜山徳爾の姿から逆に、敬虔な信仰者としての霜山徳爾の姿が浮かび上がってくるのである。

## III. カウンセラーの生き方について—コンパッションと畏敬の念、そして同行—

霜山(1987)の「若い心理臨床家へ」と副題が付された論文「心理臨床の『生きられた時間』」において、次のようなカウンセラーの生き方に関して示唆に富んだ指摘がある。「心理臨床(カウンセリング——引用者、以下同じ)にとって重要なのは、教養というのは知識を多く持っていることではなくて、その人がどれだけ思いやりのある人間であるか、ということである。心理療法(カウンセリング)というのはその上に乗っての謙虚さと畏敬の作業である。畏敬とは人間性そのものに対するそれである」(p.4)。

まず教養という言葉だが、霜山(2000,p.40)でも指摘されているようにゲーテの『親和力』における「自分を打ち明けたいと思うことは、人間の自然である。打ち明けられたことを、そのまま受け入れることが、人間の教養である」(ゲーテ1997,p.251)という場合の「教養」である。そのままを受け入れる(受け容れる)、すなわち「受容」(acceptance)であるが、それは「畏敬の念」を抱きつつ「思いやり」をもって人とかかわることから始まる。この場合の「思いやり」には霜山の共生共苦の生き方から言えば compassion という英語が当てられるだろう。そして、このようなカウンセラーの生き方そのものには「同行<sup>どうぎょう</sup>」という概念がよく当て嵌<sup>は</sup>まる。以下、「コンパッション」「畏敬の念」そして「同行」について考察を試みる。

### (1) コンパッション

コンパッションとは、一般には「思いやり」、宗教界では「憐れみ」と翻訳されている言葉だが、神学者で司祭であった H.J.M. ナウエン(Henri J.M. Nouwen)によって次のように更に明確に解説されている。「コンパッションという言葉は、ラテン語の pati(苦しみに耐える)と cum(共に)からなり、この二語を組み合わせて『共に苦しみに耐える』ことを意味する。コンパッションは、何者かが傷ついている状況へと赴<sup>おもむ</sup>かせ、痛みを負っている他者の立場へと入っていかせ、失意や恐怖、混乱や苦悩を他者と分かち合うようにさせる。コンパッションは、悲惨の渦中にある人と共に声を出して一緒に泣いたり、孤独に

苦しむ人と共に一緒に悲しみを共有したり、咽<sup>むせ</sup>泣く人と共に涙を流すことを私たちに促す。それはまた、弱い人と共に弱くなり、傷ついた人と共に傷つき、無力な人と共に無力になることを要求する。コンパッションは人間存在の本質に完全に浸<sup>ひた</sup>りきることを意味する」(McNeill,D.P., Morrison,D.A., Nouwen,H.J.M. 1983, p.4)。

この引用から考察できるのは霜山が主張する「共生共苦の生き方」とは「コンパッションという姿勢から生ずる生き方」と同種のものであるということである。更に「共生共苦の生き方」「コンパッションという姿勢から生ずる生き方」とは、究極的にはイエス=キリストの生き方であるとも指摘できる。このことに関して Johnson,P.E.(1967,pp.15-17)は次のように述べている。

英語版新約聖書においては、常に悩める者の<sup>かたがは</sup>傍にいる救世主イエス=キリストをカウンセラー(Counselor)という言葉で表現している(ヨハネによる福音書 第14章16節26節、第15章26節、第16章7節)。当時のギリシャ語では、カウンセラーという言葉は、擁護者、弁護人、あるいは仲裁者といった意味で使われており、カウンセラーの役割は「力になる」「相談を受ける」「裁判にかけられた人のとりなしをする」ことであった。したがって、イエス=キリストは、神がこの地上に遣<sup>つか</sup>わされたカウンセラーであり、人間のために神に申し開きをなし、神の赦<sup>ゆる</sup>しを請うたのである。つまり、われわれ人間が苦しみ悩んでいる時に、そばについて、共にその痛みを味わい、われわれの気持ちと苦境を察し、他の人たちがわれわれを裏切り棄て去る時にも、常に味方となってくれる人なのである。

更に言えば、com(共に)passion(苦しみに耐える)の passion という言葉は、イエス=キリストの磔刑(磔<sup>はりつけ</sup>による処刑)をも意味していることを指摘できる。罪なき者イエス=キリストが、われわれすべての罪を背負って死んでいく、罪なき者が罪を背負うゆえ真に罪が贖<sup>あがな</sup>われる、という逆説、それが贖<sup>しよく</sup>罪思想の骨子である。罪なき者が罪を背負う状況、これはカウンセリングにおけるクライアントの中にも、またそれ以外でも見られる時がある。例えば「彼らは代わってくださったのだ」とハンセン氏病患者と正面から向き合った精神科医・神谷美恵子は言った。

また霜山(1987)では、神谷美恵子が感じたような「負い目」や、中村草田男の俳句にある「許し給はれ」というハンセン氏病患者への心の叫び、「罪障感」は、本来、論理的には感じる必要のないものである。にもかかわらず、ハンセン氏病患者など、限界状況に置かれた人々に対しては「許してください」という言葉が自然と漏れる。運の貧しさに逢い、モイラ(運命)に打たれたそれらの人々に対する共苦(compassion)から内面的に「許してください」という言葉が<sup>はとぼし</sup>迸り出る。そして、これは共に人間であることへの治療者(カウンセラー)のひたすらな「祈り」にも似た気持ちである、と霜山は言う。

このカウンセラーの「祈り」に関して、精神分析家の土居健郎(1992)は次のように述べている。「一体精神科医としての私(=土居)の信仰とはなにか。それは私の前で患者が見せる暗い面をことごとく照らし出すことに存する。……(中略)…… 患者の孤独は私たちを孤独にし、患者の絶望は私たちをも絶望的にする。この意味で患者と接する者はつねに精神の危険を冒す。しかし、危険に負けてしまつては患者の暗い面を照らし出すことも不可能となるのではないか。照らし出すためには光が必要である。……(中略)…… 患者を照らし出す光が存在すると信ずるところに私の隠れた信仰があり、また私の信ずる光によって患者を照らし出すところに私の隠れた祈りも働くということである。実際このような信仰と祈り



なくしてどうして患者の真実に立ち向かうことができよう」(pp.23-24)。

この「隠れた祈り」や「隠れた信仰」を支えるのが、コンパッション＝共苦の姿勢から<sup>ほとぼし</sup>迂り出る「許してください」という言葉であり、あくまでも被造物としてのカウンセラーは「光」そのものを創り出すことはできないが、カウンセラーの徹底してコンパシヨネイトな生き方により、患者(クライアント)の暗い面を照らし出す恩寵としての「光」を、クライアントである彼ら自身が、またカウンセラーである我々自身が「大いなるもの」から直接に享け取ることにつながるのだと考えられる。

## (2) 畏敬の念

霜山(1987)も指摘するように、ゲーテは『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の中で、「畏敬の念」を基調とする彼の教育理念を次のように作中人物に語らせている(ゲーテ 2002, pp.16-23)。

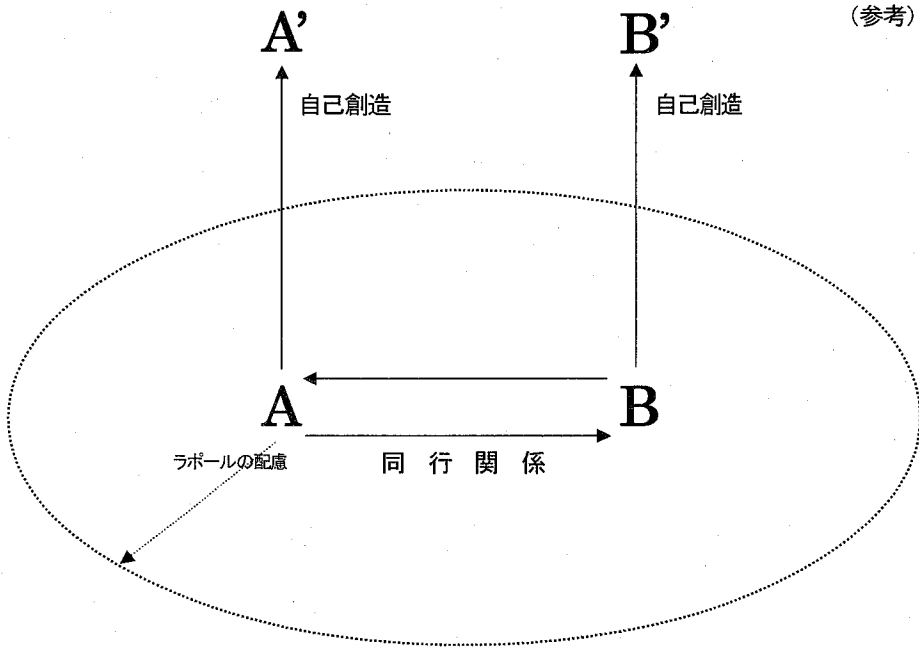
一個の人間であるために最も重要なものではあるが、誰も生まれ持って来ることができないし、またすべての人に欠けているものは「畏敬」である。この畏敬には三種類ある。第一には、我々の上にあるものに対する畏敬である。この場合の「我々の上にあるもの」とは、天や神のことであり、これに基づく宗教は種族的宗教であり、それはすべての民族のものである。第二には、我々と同等なものに対する畏敬である。この場合の「我々と同等なもの」とは、仲間や人類全体であり、これに基づく宗教は哲学的宗教であり、聖者たちのすなわち高度に善き人々、賢なる人々の霊化された共同体のものである。第三には、我々の下にあるものに対する畏敬である。この場合の「我々の下にあるもの」とは大地や世俗であり、これに基づく宗教はキリスト教である。それは苦悩と戦い苦悩によって聖化された人たちのものであり、低劣・貧困・嘲笑・軽視・汚辱・悲惨・苦悩・死をも神的なものと認める。

これら三つの畏敬から、最高の畏敬、すなわち、自己自身に対する畏敬が生じる。そして、三つの畏敬は、また、この自己自身に対する畏敬から展開する。その結果、人間は、達しうる最高のものに達し、自己自身を神と自然のもたらした最高のものとみなすことができ、<sup>うぬぼ</sup>自惚れと利己心によってまた卑俗なものに引き込まれることなく、この高みに留まることができるのである、とゲーテは語る。

「カウンセラーの自分自身への畏敬」は、心理臨床の場では患者(クライアント)もその中に含むより大きな畏敬の念へと包摂される。このことに関して霜山(2000, pp.257-258)では、心理療法(カウンセリング)の進展が可能になるためには「患者(クライアント)が一つの独自の世界であり、山や海や風や星々、それに草木虫魚の『生きられた』空間のなかにある、何のものにも代えがたいものとして、それに根源的信頼をよせることである。そしてそれを前提として畏敬が生れる。畏敬は<sup>あざむ</sup>欺かれることがあるかもしれないが、買収されることはなく、どんな批判に対しても眼をつぶらない。畏敬は人間の厳然たる限界を確信するところに基づく。この限界に到達して、残照の地平から別なものが視野にあらわれる時、畏敬の念が生じてくる。患者もそのなかに入る」と述べている。

## (3) 同行

伊藤(1995)は次のような図(図1)を示してカウンセリングにおける「同行<sup>どうぎょう</sup>」という概念の説明を試みている。



自由で許容的な雰囲気

図1 同行関係と自己創造(伊藤 1995)

カウンセリングではクライアントBが何に悩み、苦しみ、どのような自己へと自らを創造しようとしているのかに注目する。そしてカウンセラーAは、面接によって表現されてくるクライアントBの内面的世界に共感し、それを受容する。その際、カウンセラーAもクライアントBとのラポール(rapport)に配慮しながら、自らを開いていく。この場合のラポールとは、カウンセラーとクライアントの間に暖かい感情の交流があり、(1)両者共にうちとけて、自由に振舞える安心感を持ち、(2)相手に対する尊敬と信頼の念を抱き、(3)感情や意思の自由な交流・理解が可能であるような状態(有田 1993,p.224)を言う。

そして同行とは「どうぎょう」と発音し、AもBも(さらにはCもDも…)同じ地平線上に立ち、お互いが肩を組み合わせ、教わり合い、育ち合いながら、人生を歩み続けることを意味するが、その際、カウンセラーはクライアントの「今ここで生き続けていること」そのこと(存在)に絶対的価値を認める。言い換えれば、その人はその人として、ありのままをそのままに精一杯生きていることがすべてであり、そのことが真実だ、ということになる。つまり、同行(あるいは同行関係)とは「互いに主観を開示

し合い、真理に向かって人生修行を積み重ねていくこと」(伊藤 1998,p.63)なのである。なお、この場合の主観とは、クライアント・カウンセラーそれぞれの、その人なりの意味づけをもった「喜び(歓び)・怒り・悲しみ(哀しみ)・楽しみ・苦しみ・迷い・戸惑い・焦り・憤り・不安・葛藤・希望・願望・意図・意思」などの内的世界のことを指す。

この「同行の姿勢」を基本として、クライアントとカウンセラーの人格的交わりを可能にする「出会いの空間」を両者が共に創り上げていく時、その人格的交わりの深まりにつれて、クライアント、そして無論カウンセラーも、日常生活における自律性や現実性を回復させる。このことを霜山(1999)は「心を病む人(クライアント)はまさに治療者(カウンセラー)との人間的な出会いの中に新しいものの考え方や自分の生き方のゆがみを会得するのであって、そこには治療者自身(カウンセラー自身)をも揺り動かし、その邂逅によって新しい人間関係がつけられる力強い『人間と人間のふれ合い』がなければ、単なる技法だけでは役に立たない」(p.232)という言葉で強調している。このような「出会いの体験」こそ、苦しみ多きクライアントや、それに同行する私たちカウンセラーにも、明日を生きる希望を与え、おぼろげながらも「生きがい」なるものを両者にもたらす可能性があることが示唆される。

ただしそのような関係を築いていっても、霜山(1987)によれば「心理臨床家(カウンセラー)の人生の黄昏はやがて苦海に沈むのであって、決して浄土へとつながらず、従ってかつて地上で出会った狂気の人々との再会が不可能なのは、この上なく哀しい」(p.5)のである。しかし、「永遠の平安の内に、絶えざる光に照らされている彼ら(患者・クライアント)の姿を想像することは大きななぐさめである」(p.5)ことも確かである。ここに霜山徳爾の同行の姿勢を基本とした、共に生き・共に苦しむ「共生共苦の思想」の真髄を見ることができる。

#### IV. おわりに—まとめに代えて—

カトリックのクリスチャンである霜山は、「あの世で真っ先に救われるのはこの世で苦難を背負っていた患者(クライアント)たちであり、自分は苦海に沈むのだ」と言っている。それでは霜山は、なぜ苦海に沈むのか。クリスチャンは「この世で善行を施したのになぜ」とは問わない。逆に「自分は本当にこの世で善行を行っていたのか。また万が一行っていたとしても、その善行を誇ってはいけなしいし、善意の暴力ではなかったか。むしろ罪深き身を省みよ」というのがクリスチャンとしての生き方である。イエス=キリストは「罪ある者も天国に行ける」と説いた。しかし、それにもかかわらずコンパッションという言葉を深く理解し、罪深き身を更に自覚した霜山徳爾は「自分は天国には行けない。最後まで罪を背負って苦海に沈む」と言っているのである。これが霜山徳爾の人生における患者(クライアント)との同行関係を基礎にもつ「隠れた信仰」であることは想像に難くない。もっと言えば、この徹底した「共生共苦」の思想に裏打ちされた「隠れた祈り」があるからこそ、霜山徳爾は卓越した心理臨床家であり続けられた、<sup>嗚</sup>嗚、亡くなった今でもあり続けているのである。

## 参考文献

- 有田八州穂(1993)「ラポール」小林司(編)『カウンセリング事典』新曜社、224-225。
- 土居健郎(1992)『信仰と甘え』(増補版)春秋社。
- ゲーテ(1997)『親和力』(柴田翔訳)講談社。
- ゲーテ(2002)『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代(中)』(山崎章甫訳)岩波書店。
- 畑島喜久生(2006)『霜山徳爾の世界——ある心理学者にかんする私的考察』学樹書院。
- 伊藤隆二(1995)「臨床教育心理学の方法論的考察」『東洋大学文学部紀要』48、49-81。
- 伊藤隆二(1998)『「こころの教育」とカウンセリング』大日本図書。
- Johnson, P.E. (1967) *Person and counselor*. Nashville, New York: Abingdon Press.
- McNeill, D.P., Morrison, D.A., Nouwen, H.J.M. (1983) *Compassion, a reflection on the christian life*. New York, London, Toronto, Sydney, Auckland: Doubleday.
- 霜山徳爾(1987)「心理臨床の『生きられた時間』——若い心理臨床家へ」『心理臨床学研究』4(2)、1-6。
- 霜山徳爾(1995)「『見えざりし沙羅の木の花』(鷗外)——人間性心理学に寄せて」『人間性心理学研究』13(1)、1-7。
- 霜山徳爾(1999-2001)『霜山徳爾著作集』(全7巻)学樹書院。
- 霜山徳爾(1999)『明日が信じられない』(霜山徳爾著作集1)学樹書院。
- 霜山徳爾(2000)『<sup>たしやうたこんまたゆうゆう</sup>多愁多恨亦悠悠』(霜山徳爾著作集6)学樹書院。
- 霜山徳爾(2005)『共に生き、共に苦しむ——私の「夜と霧」』河出書房新社。
- 霜山徳爾・片岡千鶴子・梶田勲一・倉戸ヨシヤ(2001)「21世紀の教育と人間性」『人間性心理学研究』19(1)、45-68。